

物語を伝承し、実話に学ぶ『稲むらの火』

we support!
RQ
災害教育
センター

MONTHLY

「東北に黒龍を送ろう! 大作戦しんぶん」改め
復興支援『すけ(す)きた』
かめ(か)ぼ(ぼ)と
しんぶん

(2017.11.5 ライブドアニュースほか)

【防災教育物語『稲むらの火』あらすじ】
お祭りの準備で浮き立つ村に、地震が起きます。海の異常な様子から津波の襲来を予測した老人は、刈り取ったばかりの自分の稲むら(稲の束)につきつぎと火を放ちます。「庄屋さんの家が火事だ!」と、消火に駆けつける村人たち。こうして高台に集められた人々は、眼下で津波にのまれていく自分たちの村を目の当たりにします。命が救われたことに気づき、思わずひざまずくのでした。



1854年の11月5日に起こった安政南海地震(M8.4)では、紀伊国広村(現在の和歌山県有田郡広川町)が津波に襲われました。そのとき機転をきかせて村人たちを救った濱口梧陵(儀兵衛)をモデルにした物語が、『稲むらの火』です。ラフカディオ・ハーン(小泉八雲。怪談話で有名)が英語で創作し、中井常蔵が翻訳・再話したものです。1937年から約10年間、国定教科書の国語教材として使われていました。

この物語には、史実と異なる設定がいくつかあります。たとえば、主人公のモデルとなった梧陵は、当時老人ではなく、三十代の若者でした。また、燃やした稲むらはすでに脱穀済みの藁だったようです。さらに、稲むらを燃やした灯りは、津波の襲来に気づいていない村人たちを誘い出すためではありませんでした。じつはこのとき、村はもう津波の第1波に襲われた後だったのです。梧陵は、暗闇のなか、逃げ遅れていた人々を安全に避難させるための誘導灯として稲むらを燃やし、津波の第2波から多くの命を救ったのです。

自然災害の予知には、地域に伝わる伝承や高齢者の経験も大切。そして何より、「津波はおそろしい!地震を感じたら高いところへ逃げる」という教え:『稲むらの火』は、当時の子どもたちの心に深く記憶されました。



現代に通じる復興活動『住民百世の安堵を図る』

「すけ(す)きた」とは宮城県登米市あたりの言葉で「ボランティアに来たよ」という意味である

DECEMBER
11
2017

「稲むらの火」の物語は、村人たちが津波を免れたところで終わります。では、このあと村はどうなったのでしょうか?

津波からの復興の様子が、『稲むらの火の館・濱口梧陵記念館』の資料に記録されています。
●津波で家族や家、仕事を失った村人たちはうろたえ、村を捨てて出て行くこととする人もいました。
梧陵は考えました。「このままでは村がほろびてしまう。広村で生きていく方法はないものだろうか…。よし、浜に堤防を築こう。村人に働いてもらってお金を払い、生活に役立ててもらおう。そうすればきっと、生きる希望もわいてくるはずだ。」

●地震のあとの炊き出しで、蔵の米もすっかりなくなっていました。梧陵は家族や自分が経営する店の人に村を守りぬくための協力を求めました。
●広村の人たちは、梧陵の決断に心の底から感謝しました。畑の仕事や漁の仕事をしながら、一所けん命に働いて堤防を造っていきました。
4年がかりで全長600m、高さ5mの大きく立派な堤防が完成し、海側には松の木を、土手には、はげの木を植えました。

●長い年月がたちました。1946年に昭和南海地震が起こり、4mの津波がおそいましたが、堤防に守られた地域に津波は入ってきませんでした。
「住民百世の安堵を図る」との志でつくられた広村堤防は、今も地域の人びとを守り続けてくれています。

実は、濱口梧陵は広村と千葉県銚子に工場を持つ『ヤマサ醤油』の七代目。実業家としての活躍のみならず、私欲を顧みない社会福祉事業や政治活動に心血を注ぎ、近代日本の発展に大きな足跡を残しました。

ちなみに、『稲むらの火』の原話「生き神(A Living God)」の中で小泉八雲が英語でTsunami(津波)とつづ言葉を用いたことで、これが国際語として広まっていき、津波は英語でもTsunamiとなったのだといわれています。

右・現在も残る広村の堤防(画像:ヤマサ醤油HP)
上・松明行列や炊き出しも実施される「稲むらの火祭り」(画像:ライブドアニュース)
左・説教前と後、どちらを積み上げて「稲むら」と呼ばれる(画像:ライブドアニュース)

資料:ライブドアニュース、稲むらの火の館・濱口梧陵記念館、wikipedia、ヤマサ醤油HP、八雲全プロ